

特集

小樽中央卸市場と 運河プラザが3月末で閉 この春変わる小樽の街



▲海側からみた小樽中央卸市場

鎖 並み

観光客にとって小樽のイメージは、運河、寿司、ガラス細工といったところだろう。一方、地元の人たちは「市場のまち」との思いを強く抱いている。市場は日々の生活に欠かせない存在であり、最盛期の昭和初期には、実に25カ所を数えた。

そうしたなか、1947（昭和22）年からの歴史を誇る小樽中央卸市場が3月末で閉鎖する。その後は解体が決まっており、見慣れた駅前の風景は一変しそうだ。また、1990（平成2）年から市民や観光客に親しまれてきた運河プラザも3月末でクローズする。時代の流れとはいえず、両施設との別れを惜しむ声は少なくない。

（フリーライター・内海達志）

長崎屋の開店が転機に

小樽駅前に降り立つと、駅前広場の左手に三角市場があり、場内の狭い通路には、いつも外国人観光客があふれている。かつては閑散としていた時期もあり、インバウンドブームで息を吹き返したことは喜ばしいが、ニセコほどではないものの、全般的に価格は割高で、地元客はまず見ない。

三角市場を抜けると、眼前に国道5号が通じており、斜向かいに小樽中央卸市場の古びた建物が目に入る。完成したのは1957（昭和32）年。戦後まもなく1947年に、樺太などからの引揚者が開設したバラックで商いが始まったのが起源だ。以来、「市民の台所」的な役割を担ってきた。

くすんだクリーム色の塗装が歴史を物語るが、当時としてはモダンな建築であり、人々の注目を集めたに違いない。三角市場の賑わいは対照的に、買い物客は少なく、仄暗い雰囲気もあいまって、時代がタイムスリップしたかのような感覚に襲われる。移転や廃業で店舗は減り続け、現在は4店が残るのみ。寂寥感が漂うが、どの店も安くて良い品を扱っている。

そのひとつ、総合食料品卸の「木田商店」2代目の木田篤志さんに話をうかがった。

木田さんは、小樽中央卸商業協同組合の最後の理事長を務めた人物だ。

「親父が商売を始めた

のはバラックの時代です。それからもう70年以上になります。抱えていた借金を親父がようやく返済し、そのあと私が出資を継ぎました。昔は市場がスーパーみたいな存在で、ここも行列が絶えず、人が通れないくらい活気がありました。年末なんか、そりゃあもう大変でしたよ。時代とともにス

ーパーやコンビニが増え、さらには人口減もあって、対面販売が難しくなってしまう。市場文化が廃れていくのは寂しい限りです」

1975（昭和50）年に長崎屋が駅前に開店したことで、決定的に人の流れが変わったという。それから約半世紀が過ぎ、その長崎屋も、上階に入っているドン・キホーテ以外は昭和レトロ感を隠せない。1階の休憩スペースは高齢者の溜まり

余力のあるうちに決断

木田さんの話を続けよう。

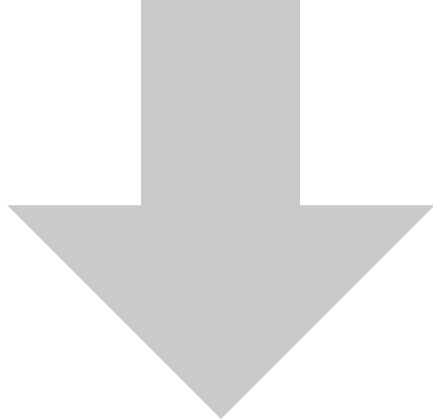
「建物も老朽化が目立ち、胆振東部地震の際は土台部分と柱が損傷

場となっており、若い世代の人口減に悩む小樽の縮図を見るようだ。市場文化の衰退も顕著で、2018（平成30）年3月に手宮市場、2020（令和2）年3月に妙見市場が姿を消している。前者は1917（大正6）年に開場した小樽最古の市場で、後者も1946（昭和21）年からの歴史があった。妙見川の上で建てられていた市場は跡形もなく、自然に戻った川の瀬音が聞こえるばかりである。

しました。資材費の高騰もあり、修繕するとなると相当なお金が必要ですからね。ご覧のとおり、外壁もコンク



▲閉鎖が迫り、寂寥感が漂う



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)